維新

御布告往來

編

單

童蒙必讀　二編

維新

御布告往来

東京　思明樓藏版

皇州春色紫陌

曙光

雪江子書

有告往来 序

御布告往来二編

石上。古き例を復さ

ん。又一新びて新しく

豊臣時より大御代の六

九曜文庫

合内外隈なく無照きせ
給皇威抑要は太政官。
邪ハ勝難正院を所謂
萬機の政所立法正く
きて九省一使は別伺等。
明亮よ検査して全國を
奉給弁を輔弼の左右院。
名も立家弓春秋よ富

一年に武部寮。各國和親
四季
浪風の立て静らき外務
省。珍物奇品疆を〻有
ゆゑ寶を競合。博覽大
會事務局。斯も明出度
文明に開化の今ゆ大
蔵省。國金銀ゆ世中も。
實治まる遠都家。民の

竈を賑して捧る貢彌
高く収納ハ租税寮。
戸籍寮とハ家の數人
別選ぶ綿密ハ調て

安國土木寮是舊称の
法作事方第宅造立營
繕を掌どる所也。
志と士ハ通ハ紙幣寮。

俗ニハ之を札と云。少文
雅ニハ楮幣と云漢ハそ
之を紙と云紙ハ神也又
上之總て貴物なれハ

金銀ニ換らるゝて。融通
自在の會計寮ハ尓ども
入を計ずして。出せハ敗ル
根元なきバ。幵を括要の

統計寮違の非法様。
改め正し検査寮賢を
撰て交まして友ある三の
驛逓寮は五畿八道就
統括逓通より限らず玉
緒の長ふ曲まぬ掛也。
直なる筆は偏無く
事速記録寮勸農寮

を世の人を大に養ひ基
立る時に遠き勉まバ。
種ハ一粒万倍なる。耕の
利を其始め。天子邑君

稲穂と。天の秧田に植し
ゆる幾千萬の年代種
蒔ふ益蕃殖し。量も盡
ぬ升数と。遠孫子孫の

正算司。治世ノ亂ヲ忘レ
ザル器械ヲ備ヘ陸軍
省殊ニ兵ハ富
國強大兵農家務ヲ示ス
猛勇ヲ怪我ノ多ク
軍醫寮造兵武庫両
司ナル乳龍庵ノ勇威光
輝二條三條連ル訴訟

の數〳〵弼の不家も家勇
裁判所釋く鞭よ鑞を
光〳〵れ騎兵の勇まゝ
勝ふ兼〳〵る槍銃よ歩

兵ゞ進退熟得し海軍
者や勇将の下にて弱
卒なゞ信一賢人を揀
ゞ立身出世れ文都者

小人匠人あらざるハ。
偏枯なる者。編輯寮
正直正明博物館ハ大
學區と稱するハ一天四
海ハ聚波旭の昇東京
より庶民を二万く愛知
岐や三ぎ石川流を
行水の四澤ハ滿てふ。

春は始め大坂を越て
五畿七道の名所。何事も
はるかに廣く遠く。猶も八
行雲ながれ水。自然路も

長崎へ七寶運ぶ外國の
船は新潟へ寄こしたり。
八卦の吉方青森の下
蔭仰民を一言無學

世世恩惠也。其人毎ゝ
性素直の大小賢愚不
ゝ善道設ける。神儒
佛法の教部省教神愛

國尊朝の三條ゝ元使
雅楽寺神宮僧侶説教
小。登ゝ講座の奏楽
伐撥出生彩開化の

方今神路奉戴著明ニ
方便本地ヲ摘ミ繁茂
側柏の表裏なく垢穢の
塵跡を洗ひ清め陰雲
川水濁まくして種子
百の道に工部省世の為
人に重寶を作る親ハ
工學寮ニ升式勵ん勸工京

偖鑛山孔所稽を振出
す。金銀鐵道寶出き姫
豪造船案を走る目的者
電信案方圓深淺規

矩準繩確乎と正を測
量司。海山こゝ好て何
要迄も恵ませ給ふ德澤
布告を犯す者あるべバ。

関を神明に比明きハ
則王法弘司法省上程
石捕ふ東西南北四隅
合して八方八関ふ徹る

洋燈の燈炎と明法寮之
理非黒白判然として有
故ニ天下ハ信實太平也
樂哉

て宮内省内

膳内匠頭度能三司十
二妃卿妃子。皇代の絶
せぬ以国地山林曠野
不毛の地洪大了壑
開拓使力の疆里島二の
啼吾妻ハ名詮自称ス。
今や其音の東天紅皇
居となりし東京府。

変ゝ縣弥増ゝ明る京都
府其作小別ゝ内裏を
遷し江の此小戸ぞぬ
春平と御代萬歳と異

口同音人大板府三津
なゞゝ何ゝ言く棟上の大
區小區ゝ番号付潤家
志ゝ新人家ゝ小細ゝ

書一位名譽ハ將軍
心一化して愚説よ或て
也陽暦ハ改ハ理よて。
多方乖離ぬ子の月
が。第一月の祝月。三五七
八十十二四。七月ハ一月
ハ。日數三十一日。之をハ
大の月と云。四六九十一

此四月を。一月三十日。之を
小の月と云。二月計が
日数只廿八日平の月。
合して三百六十五。
丸一年にて立返る年
の始を考へて。二月
より程の遠きハ。四
季を司る神の。

音しきを通ずる種子
より隙なき晝夜二十
四時。古き稱の九時を。
十二時として朝夕弘。

六時とも六時。
紙て時數の遇なるハ。
淫夢社時刻して高
き即生者多。例せ

ゞ一时の半数を。舊稱の九時半。二时ゝ
重なるハ时なり。其他推て知るべき事。

正午十二时を央て。他時の前後ゝ
ゝ。髮の毛程も爽さ。毫ゝ

夕時過より程。夜の十
二時より迄。午後の
何時と之を云。扨の一
時より始。前を。午

前何時と之を云。同時の
名をも句つゝ扨ドン
タクも皆一六書その
中ゝ軍務校七曜中

の日曜日英語より之を
ソンデイと優美に移
時津風枝もなきまぬ
千秋の業が民
自主自由。外交
各國の上に輝く日
の本は神社後裔の
八百萬。四海に溢れ

皇威発大繁昌日
小増る開化の方今
こゝ我等なる御布告達来二通